



「初め、基礎、土台」

キリスト教センター ミカエル 加藤 俊彦

キリスト教の教えの中で「初め」ということが、とても大切にされていると思います。旧約聖書の創世記には「初めに神は天地を創造された」、新約聖書のヨハネによる福音書には「初めに言葉があった」と、それぞれ、その冒頭に書かれています。「初め」と言ったとき、その言葉には二つの意味があると思います。一つは時間的な初めです。人の生涯における時間的な初めは誕生日であり、この学院の時間的な初めは1963年4月です。どのような出来事にも必ず時間的な初めがあります。

そして、もう一つの意味は根源、基礎、土台ということです。この学校であれば1963年4月に創建された時、創立者の八代主教は「神を畏れ、人を恐れず、人に仕えよ」という建学の精神を、この学院の礎、土台としました。企業であれば創業者はそもそもの初め、どのような考えや理念に基づいて会社を創ったのか、いわゆる創業の精神があります。キリスト教で「初め」と言ったとき、時間的な初めという理解ではなく、後者がすなわち基礎とか土台という意味合いが念頭に置かれていると思います。

キリスト教に限らず、何事においても、基礎や土台というのは大切にされています。建造物も、基礎や土台をしっかりと頑丈に作らないと、地震や災害にあったとき、傾いたり倒壊したりして被害が出ます。野球でもキャッチボールという基礎が正確にできることによって、強烈な打球を取り、また華麗に送球もできます。基礎がしっかりと出来て初めてファインプレーができます。大学での勉強でも、まず一年生で取るべき基礎科目があり、勉強の仕方を学んだ上で専門科目へと進みます。

ではなぜ、初め、基礎、土台が大事なのでしょうか？私が考えるところですが「立ち上がって、前に進むため」なのではないかと思います。例えば人が前に進むためには、立たないといけない。立ち上がることによって、自ずと前と後ろが出てきます。顔が向いている方が前で、その逆が後ろになります。立ち上がらないと前と後ろが分からないし、当然前には進めないし、後ろにも退けません。赤ちゃんは初めは立てません。何とかつかまり立ちして立ち上がり、次に伝え歩きを試みます。何かにつかまりながら前へ歩こうとします。後ろに歩こうとする赤ちゃんは、聞いたことがありません。立ち上がることで、自ずと進むべき方向がわかります。

どこに立っているか、その足元を見定めることは、前に進む上で、とても大切なことです。自分がどこに立つのか、何を土台にして立つのか、その立ち位置さえわかれば、自ずと進むべき方向や将来や目標も見えてくるのではないかと思います。自分が立つべき足元を見失うと、進むべき道を見失うことになりかねません。立つべき土台が不明瞭だと、進むべき方向を間違えかねません。それ故に、土台や基礎は、私たちが生きていく上で、とても大切なものだと思います。

そこでキリスト教ですが、人が人として生きていく上での土台、基礎を私たちに教えているのだと思います。キリスト教は、人間とは何ですか？ 命とは何ですか？ 生きるとは何ですか？ 死とは何ですか？ そして、死を突き抜けたところにある復活とは何ですか？ ということを伝えようとしている宗教だと思います。そのような人が生きていく上での基礎、土台となるものを、チャペルから発信できればと思います。キリスト教とは、一言でいえばこの世の中でのたった一回きりの、後戻りが利かない、一方通行の、一直線の人生において、人が人としてどうやって生きていったらいいのかを語ろうとしている宗教なのだと思います。

一口メモ キリスト教の信徒

日本では少数派に思えるキリスト教ですが、日本のクリスチャン人口は約100万人といわれています。世界を見るとカトリックとプロテスタントを合せて25億人と推計されており、世界の3人に1人がクリスチャンで、イスラム教、ヒンズー教、仏教の順に続きます。アジアではフィリピンが最も多く9割がキリスト教、韓国でも3人に1人がクリスチャンといわれています。

